



第22号
平成29年7月1日発行
発行者
藤香会事務局
092-724-0007
発行責任者
毛屋 嘉明

平成29年度総会が開催されました Ⅲ 諸議案を承認Ⅲ



山崎 拓 会長

5月28日(日) 11時より鳥飼八幡宮参集殿で平成29年度総会が開かれた。国歌斉唱の後、山崎会長より、「昨年の総会で創設した賛助会員にご理解をいただいた多数の企業・団体に会員になっていただいた。当会の財政基盤を強化して会の歴史に誇りを持つ市民意識を顕彰し、郷土の歴史に誇りを持つ市民意識を涵養してゆきたい。」との挨拶があった。

続いて28年度の事業および決算報告と、29年度の事業計画および予算案が原案どおり承認された。

新理事案も承認されて今後2年間、会の運営に携わることとなった。

28年度まで理事を務められた山崎美美子氏と近藤みさ子氏が退任、新しく高倉照矢氏および西田経敏氏が選任された。また空席となっていた顧問に鈴木襄二氏が就かれ、指導を仰ぐことになりました。氏は昭和62年に理事となられ、その後23年間理事を務められ、その内5年間は事務局長として本会の運営や11年間にわたって史跡巡りの計画立案に携わって来られました。

1. 主な決定事項

(1) 新役員

- | | |
|-------|-------------|
| 名誉顧問 | 黒田長高 |
| 会長 | 山崎 拓 |
| 顧問 | 鈴木襄二 |
| 副会長 | 毛屋嘉明 |
| 事務局長 | 田島満行 |
| 事務局総務 | 原 俊樹 |
| 事務局 | 大島泰治 |
| 研修 | 田中崇和 |
| 広報 | 天本孝久 |
| 会計 | 浜田泰祐 |
| 理事 | 栗山順子・近藤みさ子 |
| | 馬頭徹夫・森 純子 |
| | 山崎美美子・三野原信二 |
| | 徳永良子 |
| 事務局員 | 松尾 等 |

(2) 年間行事

今年度の年間行事は、如水公、長政公、忠之公の法要の他に、黒田家ゆかりの神社参詣を昨年より新たに追加した住吉神社、警固神社、宮崎八幡宮、太宰府天満宮、宗像大社と従来の光雲神社、鳥飼八幡宮、紅葉八幡宮の8社を参詣することにした。

また9月23日には、黒田職隆公の墓標改装のあった大長寺に長高様が参列されて法要が行われ、当日は藤香会からも参列することになっています。

歴史勉強会は9月8日に福岡市博物館で、歴史研究家であり当会会員でもある石瀧豊美氏に「黒田家と奨学事業」と題して講演

をいただく予定です。また史跡巡りは11月7日に宗像大社をはじめ古墳などを巡って研鑽を積みこにしています。

総会時の講話は会員である讚井勝彦氏(株式会社サヌイ織物社長)による「黒田藩と博多織」と題しての講演があった。

2. 卓話

演題「黒田藩と博多織」

(株)サヌイ織物

社長 讚井勝彦氏



博多織は博多の商人満田弥三右衛門が鎌倉時代(1235年)に承天寺の理一國師とともに宋に渡り、持ち帰った唐織から始まったと言われている。1540年に弥三右衛門の末流の満田彦三郎に師事した竹若藤兵衛がタテ糸とヨコ糸の組み合わせ方(織物組織・織り方)を工夫・発明して博多織と名付けた。

江戸幕府が成立すると、福岡藩の初代藩主長政公は参勤交代の際の幕府への献上品として博多織を指定し、以後「献上博多織」とよばれるようになる。歴代藩主から手厚い保護を受けて、博多織は福岡藩の特産品となった。第十一代藩主長溥公は將軍や幕閣のみならず朝廷、薩摩藩主島津斉彬公の正室、後に太政大臣となる三条實美などにも献上している。

明治以降、博多織は従来の手織から機械織へと大変革を遂げ、それに小物類(財布、ネクタイなど)を加えるなどして現在に至っている。

福岡市西区小戸には「博多織工芸館」があり、

資料の展示や工房見学などが行なわれており、手織体験もできるようになっている。

サヌイ織物は2002年に福岡国際会議場の大観帳を製作している。

(理事 大島泰治記)

忠之公の364回忌法要

命日の2月12日、菩提寺の東長寺で長高様をお迎えし会員50名が参加して執り行われた。

法要は東長寺ご住職藤田紫雲師の読経の中、参詣者が焼香を行いました。

終了後、老師の法話と長高様の挨拶があり、長高様は「忠之公は騒動を引き起こした藩主で負のイメージがあるが、多くの寺社を創建または再建して領民の安寧を祈り願った大名であった」旨の話をされました。



焼香する会員の皆さん(東長寺)

会員クリック②



会長 春田 整秀

「高祖神社修復事業」についての報告とお礼

高祖神社の修復事業は氏子および奉賛者ならびに関係者の暖かいご支援、ご協力により見事に完工いたしましたので、特にかかわりの深い黒田様および藤香会の皆さまに御礼と事業の報告をさせていただきます。

高祖神社は怡土郡の総領守として1200年を超える歴史を有しておりますが、永正4年(1507)、当時の高祖城主原田興種公によつ

如水公の414回忌法要

如水公の命日である3月20日11時から墓所のある崇福寺で第414回忌法要が営まれました。長高様をはじめ会員73名の参列があり、本堂での読経・焼香に続き、墓前での読経・焼香を行って、正午過ぎに滞りなく終了しました。

今回は、賛助会員の代表者の参加もあり、今までにない参列人数となりました。



その後、タカラホテルに場所を移して長高様歓迎の懇親会が64名の参加で和やかに行われました。いつもながら長高様と会員の懇談、会員同士の交流と話が弾んでいま

て現在地へ遷宮されました。寛文2年(1662)には福岡藩3代藩主黒田光之公の用材寄進で再



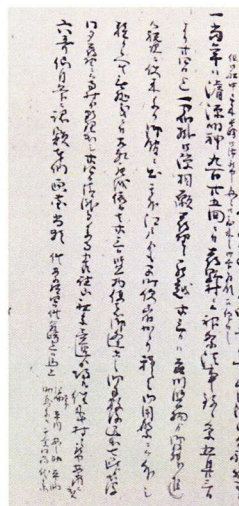
修復工事がなった高祖神社の全景

建され、更に元禄6年(1693)に4代藩主綱政公によつて石鳥居と石段が建立されました。爾来、原田氏および福岡藩の庇護を受け、その後は氏子の弛まぬ奉仕によつて今日に至っております。しかしながら近年に至つて老朽化が顕著になり、本格的な修復を行なう必要に迫られ、氏子および関係者によつて平成20年に検討委員会を設置し、その後実行委員会、奉賛会を組織化して具体的な取り組みを進めてまいりました。奉賛金をお願いするに当つては氏子は元より広くご協力を賜る必要があるため、ご縁の深い黒田家のお力を借りたく16代の黒田長高様に本奉賛会の名誉会長に就任していただきました。お陰さまで昨今の厳しい経済情勢にも拘らず多額の寄付をいただくことができました。これもひとえに黒田様のご名声と関係者一同の懸命の努力の賜物であると。改めて深くお礼申し

あげるところでございます。黒田様の名誉会長就任に際しては、藤香会ならびに黒田奨学会の方々の格別のご尽力に対し重ねてお礼申し上げます。この「平成の大修復」事業は約3年半の工事期間を含み、計画立案から概ね九年の歳月を要しました。今後は皆さまのご恩に報いるためにも更に奉仕の精神を強めつつ、将来における国の文化財指定を目指して一層の努力精進を重ねてゆく所存でございます。終わりに福岡県および糸島市のご援助に厚くお礼申し上げます。産土の神殿新たに藤香る



福岡藩の家老を務めた立花平左衛門弾正は嘉永元年に右筆所詰を仰せつかり、そこから始まる日記が県立図書館に残っている。立花家は黒田氏の筑前入国以前からの



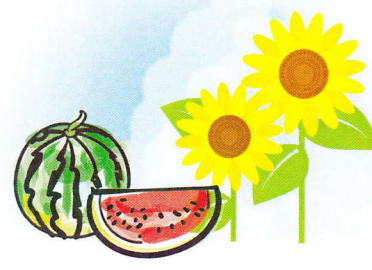
立花平左衛門日記より 出後 同夕薦野ニ 而當村より料理出シ 廿四日清瀧寺 参而養徳山社 参 書過より帰ル 往 来共村々庄や案内 二出ス 六哥仙自

豪族で、薦野村(現古賀市薦野)に拠点を置いた丹治式部少輔峯延が薦野氏を名乗り、やがてその子孫が立花城主戸次道雪に仕え、道雪の家督を継いだ立花宗茂に仕えることになる。 「立花平左衛門弾正日記」には嘉永2年5月23日より24日まで一宿掛けで、瀧源(しゅんげん)明神(丹治峯延)の925回忌を営むことの記述がある。 「當年八瀧源明神九百廿五回二付 薦野村

筆二認 額奉納 画團尚頼 薦野氏、戸次氏、立花氏は親族関係にあつて、瀧源明神を立花平左衛門弾正の遠い祖先としたことで、縁のある清瀧寺や養徳山社へ参詣して自筆で書いた六歌仙の額や團尚に頼んだ絵などを奉納している。

★新規入会員紹介

平成29年2月	古川 武史
3月	中村 勝広
4月	武部 自一
中畑 孝信	
6月	大野 三貴
小幡 修	
協賛会員	
六月現在	35企業・団体



編集後記

「ちよっとうんちく」にも書きましたが、今年4月より立花平左衛門弾正日記に挑戦しています。公式な記録ではなく私的な日記なので、弾正個人の「思い」が書かれています。公式な記録よりも人間味があり面白いのですが、文字が小さいのと癖字で1丁読むのに2~3週間掛っています。(天本記)